

I 事業の概要（地域の実情含む）

東日本大震災や大雨に伴う土砂災害・大規模水害、火山災害など、近年多くの災害が発生している。また、登下校中の自動車等による交通被害などが後を絶たない今、児童生徒が自らの命を守り抜くため、「主体的に行動する態度」の育成と、「安全で安心な社会づくりに貢献する意識」の向上を図ることが重要である。

本事業を通じ防災教育を中心とした安全教育・安全管理等に取り組むことにより、日常生活で起こりうる災害や事件・事故の発生原因、安全確保の方法を理解し、安全に行動するための危険予測・回避の能力を身につけさせるとともに、学校の安全管理体制の再構築・強化が図れると考える。

また、災害ボランティア活動をとおして、地域郷土を知り、震災津波の体験から「いきる」「かかわる」「そなえる」の3つの教育的価値について自らのあり方を考えさせるとともに、将来の復興・発展を支える人づくりにつなげたいと考え、本事業を計画実施することとした。

II 取組の概要

(1) 実践事業概要

本事業実施にあたり、災害には二度と同じものがなく「こうすれば必ず助かる」という正解は存在しない。マニュアル通りにはいかず、どこに自分がいるのかにより避難の行動は異なる。多様な災害、様々な状況下でも、その瞬間に命を守るためには、自分の目でその時の状況を見て、自分の頭で考え、予測し動ける力が必要である。そのためにはこれまでの防災教育や避難訓練、マニュアルの再検討が必要であり、今の課題とあるべき方向性を考察していくためにも本事業に取り組んだ。

例えば、本校が平成25年度まで実施した集団避難訓練では、LHRの時間を利用して担任が「おはしも」のルールの中、生徒を引率して速やかに指定された避難場所に引率する訓練が実施されてきた。従来の火災想定に加え地震を想定した避難訓練が行われており、事前指導のなかで災害が命や悲しみに直結するものであることが理解され、誰もが真剣に熱心に向き合い実施されていたが、受け身の防災教育であり、フィードバックが活かされない避難訓練であって、学校独自の

災害対策マニュアルづくりへの困難性が見られた。

これらに対しどのような方向で考えていくべきか。防災教育や避難訓練、マニュアルづくりにも共通して、主体的なモチベーションの高さ、自ら考え判断し動ける主体性、自立や自律が求められるべきではないかと考える。

本事業では、これまでの防災教育・避難訓練を否定するのではなく、継続性を持たせつつ、新しい防災教育へと移行することを目的とし、これまでの集団避難から個の対応により重点を置き実施した一年であった。

災害はいつどこで起きるか分からないことから、自分の命を守るために、その瞬間に必要なのは、危険に気づき、目の前の状況や対象から必要な情報を得ようとするセンシング能力である。

避難とは、危険が予想されるところからより安全なところへ移動することである。どこにいても助かりたいと考えるなら、何が危険かを理解する必要がある。しかし、これまでの避難訓練では、「一時避難場所へ行く」パターンを訓練してきた。

センシング能力を磨き高めるため、イメージ力、課題発見力、状況把握能力、空間認知力を身につける防災教育や避難訓練が必要である。

また、災害にはこうすれば必ず助かるという正解は存在しない。同じ災害でも同じ状況は決してないからだ。ここでグラッと大きな地震が起きたらとイメージし、キケンを意識し、無意識から意識化を図ってみる。意識することではじめて物事の全体像が見え、普段気にならなかった日常の中の危険性に気づくことができる。

このようなことを意識し、今年度本校では本事業においてプロジェクト手法による避難シミュレーションプログラム（『図上シミュレーション』と『シェイクアウト訓練』）などこれまで行っていなかった、避難訓練・防災教育を行った。

(2) 具体的実践内容

ア 教職員研修「防災講話・防災ゲーム」

(ア) 実施日：平成28年9月9日(金)

(イ) 講師：岩手大学地域防災研修センター
客員教授 越野 修三 氏
特任助教 菊池 義浩 氏

(ウ) 対象：本校職員

(エ) その他：学校防災アドバイザー派遣事業との合一事業として実施

(オ) 内容：

①防災講話『大災害からの教訓』と題し、過去の災害から考える、課題とリスク、危機(災害)対応や効果的な危機対応について。

②教職員向け防災ゲーム(クロスロード)の実施

イ 緊急連絡配信システムを活用した新しい避難訓練(シェイクアウト)

(ア) 実施日：平成28年8月24日(水)

(イ) 対象：本校職員、生徒、保護者、地域住民

(ウ) 内容：

地震の揺れから身を守る安全行動の意識づけ、防災意識の高揚と知識向上を図る目的で実施。ポスター、チラシ、学校HPにて呼びかけを行い、当日は緊急連絡配信システムおよび校内放送等を利用し、災害情報を発信し実施。

ウ 気象庁ワークショップ「経験したことの無い大雨その時どうする？」(図上シミュレーション訓練)

(ア) 実施日：平成28年7月26日(火)

(イ) 講師：盛岡地方気象台
防災気象官 三上康治氏 他5名

(ウ) 対象：情報ビジネス科1年 35名

(エ) その他：学校防災アドバイザー派遣事業との合一事業として実施

(オ) 内容：

グループ毎に地図を使いシナリオ(時間経過)に沿ってシミュレーションを行う訓練。普段立ち寄る場所にどのような危険が潜んでいるか、避難所の場所、避難ルートなどを検討していく。グループ毎に地域の特性が違い、最後にプレゼンテーションを行い、学習内容の共有を図る。

エ 関係機関と連携した防災訓練

(ア) 実施日：平成28年7月6日(水)

(イ) 講師：一関北消防署職員3名

(ウ) 対象：本校職員・生徒 443名

(エ) 内容：

生徒職員には実施日のみを伝え業間に訓練を行った。生徒たちが自ら考え判断し動ける主体性と教員の指示伝達経路の確認に重きをおいた訓練を意識した。

オ 被災地ボランティア

(ア) 実施日：①平成28年7月27日(水)

②平成28年12月18日(日)

(イ) 実施場所：①②陸前高田市

(ウ) 対象：①情報ビジネス科1・2年、
普通科2年Iコース 104名

②希望者 21名

(エ) 内容：

今年で4年目となる陸前高田市のボランティア活動に参加。夏祭り会場の草取りや整備や仮設住宅周辺の環境整備を行った。7月は活動後、現地ガイドによる被災地案内・震災語り部を実施し、防災意識の高揚を図った。

カ 災害時炊き出し訓練

(ア) 実施日：①平成28年10月15日(土)

②平成28年12月5日(月)

(イ) 実施場所：①一関水辺プラザ②本校調理室

(ウ) 対象：①②情報ビジネス科3年 26名
1年 35名

(エ) その他：①2016熱気球ホンダグランプリ
第4戦一関・平泉バルーンフェスティバル内にて実施

(オ) 内容：

①イベント会場にて「豚汁」の炊き出しを行い来場者に振る舞った。

②「家庭総合」の時間、調理実習でアルファ米と豚汁の調理を行った。調理実習後、実際の炊き出しをイメージし、混雑が起きないように生徒たちで工夫しながら1年生に配布・提供した。

キ 授業(理科・家庭科)での防災教育

(ア) 実施日：①(理科)平成28年12月1日(木)

②(家庭科)平成28年10月25日(火)

(イ) 対象：①普通科3年B組「地学」23名

②普通科1年C組「家庭基礎」33名

(ウ) 内容：

①の発展学習として、岩手県地質概略図・岩手山火山防災マップ・一関市防災マップを活用し、身近な地域の学習を深めた。

②「救助が来るまでの3日間」を生き延びるために必要な持ち出し品について考え、非常時の心構えと「備える」ことの重要性について学習を深めた。

Ⅲ 取組の成果と課題

(1) 成果

今年度は様々なシミュレーションや防災教育・避難訓練を実践してきた。実践にあたり、特に意識していたこととして、経験し避難力（イメージ力・状況判断力・危険予測力・空間認知力）などを高め、身につけたことを活かし「防災・避難訓練」を行うことで、「自ら考えながら避難する訓練・防災減災への取り組み」が実現する。考えながら訓練等に取り組むことで、現実の課題に的確に気づくことができるのだと考える。

(2) 課題

取り組みの中で、本事業（本年度）内では取り組むことができなかつたこととして挙げられるのが、マニュアルの作成である。シミュレーションや補助教材として活用した市町村などの各種ハザードマップや避難マニュアルなどは、住んでいる地域のリスクや避難所、いざという時に身を守るための基本的なこと、例えば「頭を守って避難する」「常に避難用具を身近なところに置いておく」など、知識として得ることはできる。しかし、そのマニュアルは最大公約数の内容が網羅されたものであり、いざという時に『自分のところでは』どうしたら良いのかまでは分からない。自分がいつでもどこにいるときに災害が発生するかにより、避難行動は変わる。そのときにどう行動すべきか、行動できるのかという視点において「こうする・こうやらなければいけない」というマニュアルは存在しない。

どこの施設でも防災マニュアルは持っており、本校もマニュアルは作成している。しかし、いざその瞬間に防災マニュアルを読んでから行動するということは基本的にはない。公施設であれば自分の行動だけを考えることはなく、守るべき子供たち、施設を利用している人たちを誘導する、など自分が果たすべきこととして直結し、機能しなければならない。一般的・抽象的な内容でなく、「自分」がとるべき行動の一つひとつが具体的に見えるものであれば、マニュアルが存在意義を持ち、マニュアルをそばに置き度々目にするようになると思う。

様々な災害、どんな状況下でもその瞬間に生き延びることができるためには、何より自分で考えることができ、状況を見て判断し、決断できる強い心と勇気を伴う行動力が身につくような避難訓練、そしてその瞬間に使える防災マニュアルを考え出すことが必要である。

次年度ではそのような自分たちのマニュアルづくりを行う。そのために、実際の避難訓練の前に生徒たち・教職員とそれぞれの立場ごとに図上シミュレーション

を行い、課題発見・課題解決策を考えたのちに行う避難訓練（課題発見型避難訓練）の実施を計画している。事前に図上で問題点・発生しうるリスクを多面的・俯瞰的に思考し、実際の避難訓練時に、「ここが危ない」など考えながら逃げる。自分の目で見て考えながら逃げる避難訓練は実際の災害時にも考えることができ、頭の中で瞬時の試行錯誤をしながら逃げられる力が身につくと考える。そして、図上シミュレーションや避難訓練のフィードバックを活かし自分たち（学校全体・教職員・生徒それぞれ）で独自の避難マニュアルをつくる。誰かがつくって、これでやろう、というやり方でなく、一人ひとりが自分ならどうできるのか、を考え、同じ環境にいるみんなで作るということが大事である。マニュアルを完成させることが目的ではなく、つくる過程でそれぞれの防災意識が高まること、普段も意識することが大事であると思う。そして、自分たちがつくったマニュアルだからこそ、役立ち、それぞれがどう動けばいいかわかるはずである。そのために、

- ①目標をもった避難訓練
- ②避難訓練で発見した課題の共有
- ③自分が動ける独自のマニュアルづくり
- ④個人知を全体知にして進化するマニュアル

がポイントである。

マニュアルは、状況に即してどうしていいか行動や方法を示した手引き書である。避難マニュアルであれば、より安全に避難できる。次年度はプロジェクト手法を用いて、学校・生徒・教職員それぞれのマニュアル作成に向けた防災教育を展開したいと考えている。